The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	葉性萎縮症例の言語機能
Author(s)	橋本, 衛
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3109972
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【54】

氏　　名	橋本　衛（はしもと　まもる）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学位記番号	第　12403　号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学研究科内科系専攻
学位論文名	**葉性萎縮症例の言語機能**
論文審査委員	（主査） 教　授　米田　悦啓 （副査） 教　授　早川　　徹　　教　授　柳原　武彦

論文内容の要旨

【目的】

近年，臨床的に明らかな記銘力障害，視空間性の障害，あるいは計算障害等の後方症状を伴わず，進行性の行動異常や人格障害等の前方症状を呈し，かつＣＴ，ＭＲＩで前頭葉ないしは側頭葉に葉性萎縮を認める症例が報告され，それらは現在前頭側頭型痴呆という広い概念のもとに捉えられている。これらの症例では，前頭葉症候に加えてしばしば言語障害を伴っているが，その言語症状を詳細に検討した研究は少ない。そこで本研究では，葉性萎縮症例の言語機能を検討し，さらに病巣との関連を考察した。

【方法ならびに成績】

対象は，言語障害もしくは行動異常が緩徐に進行し，ＭＲＩ画像で前頭葉ないしは側頭葉に限局した楔状の葉性萎縮を認めた23症例（男性13例，女性10例，平均発症年齢58±6.3歳）。言語症状は，臨床評価に加えてSLTA，Marieの３枚の紙テスト，Token Test，語義失語テスト，ならびに諺の補完現象検査を施行し評価した。萎縮部位は，全例にＭＲＩを施行しその水平断像，冠状断像から同定した。

その結果，20例に言語障害を認めた。そのうちの18例では，行動異常，自発性の低下等の前頭葉症候がみられた。症例は言語症状の有無およびその内容に従って７つの群に分類された。Ａ群）11例。音声言語において語音把握は良好であるのに語義理解が不良で呼称障害を伴い，文字言語で仮名文字の障害がごく軽度であるのと対照的に漢字の読み書きに困難さを有し，加えて類音的錯読を認め，いわゆる語義失語像を呈していた。ＭＲＩでは，全例側頭葉の非対称性の著明な萎縮を認めた（９例は左側優位，２例は右側優位）。萎縮は側頭葉内側部から外側部まで及んでいたが，上側頭回後方部には萎縮は認めなかった。なお１例で前頭葉の軽度の萎縮を認めた。Ｂ群）１例。呼称障害に加えて軽度の語義理解障害を認めたが，漢字の失書を認めず語義失語像を呈していなかった。脳萎縮は両側側頭極ならびに側頭葉内側部に限局し，側頭葉外側部は比較的保たれていた。Ｃ群）５例。明らかな呼称障害を認めるが，語義理解障害を認めなかった。ＭＲＩでは，前頭葉の著明な萎縮に加えて側頭葉にも萎縮を認めた。側頭葉の萎縮は，部位，程度ともにＡ群とほぼ同じであった。Ｄ群）１例。初期に，字性錯語を伴う非定型的な流暢性失語像を呈し，その後構音の障害が加わった。上側頭回に強調を有する左側頭葉の限局性萎縮を認めた。Ｅ群）１例。非定型的な非流暢性失語像を呈していた。前頭葉外側面，側頭極の萎縮に加えて左前頭葉弁蓋部の明らかな萎縮を認めた。Ｆ群）１例。顕著な反復言語を認めたが明らかな失語を認めなかった。ＭＲＩでは，右側頭葉の限局性萎縮を認め，特に右上

側頭回に顕著であった。萎縮は前頭葉にも一部及んでいた。G群）3例。明らかな言語障害を認めなかった。そのうち2例では萎縮は前頭葉に限局しており，残りの1例では前頭葉の著明な萎縮に加えて右側頭葉前方部にも萎縮を認めた。

【総括】

本研究では，症例は言語症状から7つの群に分類され，各群内では共通した萎縮の分布様式を示し，言語症状が異なれば萎縮の分布様式も異なっていた。さらに，部位，程度ともに同様の側頭葉の萎縮を有しながらも，A群では語義失語を呈するが，前頭葉にも著明な萎縮を認めるC群では語義失語を呈していなかったことから，言語症状は単一の萎縮の部位に帰着するよりもむしろ，萎縮の分布様式と密接な関連があることが明らかとなった。以上より，葉性萎縮症例では言語機能が系として障害される可能性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

葉性萎縮症例では病初期より人格・行動面の障害が目立ち，また語健忘，常同言語等の言語障害を来たすことが知られているが，その言語機能を詳細に検討し，病巣との関連を明確にした報告は少ない。

本研究では，前頭葉ないしは側頭葉に限局した楔状の脳萎縮を有する葉性萎縮症例23例の言語機能を検討し，さらにMRIおよびSPECTを用いて放射線学的検討を加えた。その結果症例は言語症状から，A）語義失語像を呈した11例，B）軽度語理解障害と語健忘を呈した1例，C）理解障害のない語健忘を呈した5例，D）非定型的流暢性失語像を呈しその後構音障害が加わった1例，E）非定型的非流暢性失語像を呈した1例，F）顕著な反復言語を認めた1例，G）言語障害を認めなかった3例，の7つの群に分類された。放射線学的検査の結果，各群内では共通した萎縮の分布様式を示し，言語症状が異なれば萎縮の分布様式も異なっていた。以上の結果から，葉性萎縮症例の言語症状は萎縮の分布様式と密接な関連があり，従って葉性萎縮症例では言語機能が系として障害される可能性が示唆された。

これらの知見は葉性萎縮症例の言語機能とその神経解剖学的基盤についての理解に寄与するものであり，学位に価するものと考える。